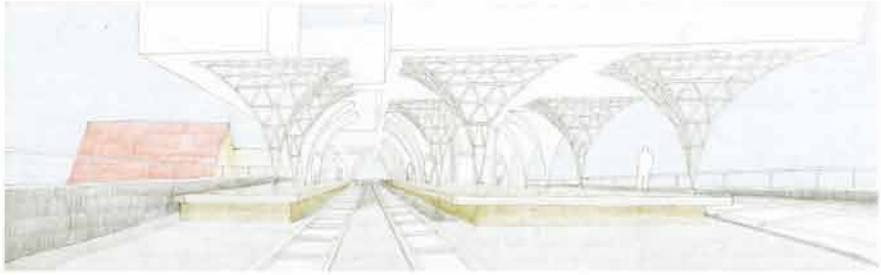
「電車で出会う物語がある～ JR 中央線　本の森計画」川畑　華子

電車で出会う物語がある　ＪＲ中央線本の森計画

川畑　華子



本が好きで
電車が好きで
電車で読書をするのが大好きなあなたのために
駅に図書館をつくりました

いつも忙しいあなたのために
ホームの上につくりました

あなたがいつでも行けるように
駅前にもホームにもキオスクにもつくりました

途中下車が好きなあなたのために
いろんな駅につくることにしました

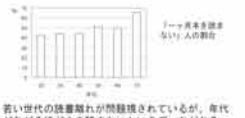
中野から国立にいくまでの車内で読んだり
国分寺で特別快速を待つ間に選んだり
たまには一日中本を読んで名古屋まで行ったり

目印は本の森です

早くここで本をみつけて
電車で出会う物語があるから

読書人口の低下と出版業界の現状

・若い世代の読書離れは本当か？



若い世代の読書離れが問題視されているが、年代があがるほど本を読まないというデータがある。学校での読書推進活動により、むしろ、社会人などのほうが「忙しくて本が読めない」といった状況になっている。

・電車で読書をする人は日本人が多い

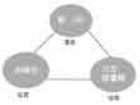
電車内における読書率は新聞や印刷物も含め、以前から２０％前後と意外と多い。電子メディアの普及で、電車内の光景は読書をする人よりも携帯電話を見ている人のほうが増えてきてはいるが、書籍の利用率は常に7～10%を維持している。

・なぜ、本が売れないのか？
「再販制」と「委託販売制度」

「再販制」
書籍の発行者が定価を決め、小売店がそれを守る制度。本は基本的に値段は常に一定。
「委託販売制度」
書店は出版社から仕入れた本を売っているのではなく、委託されている。本が売れるとそのうちから手数料分だけが手に入る仕組み。

ライブラリーのシステムについて

本に興味を持ってもらい、本を好きになるような施設とそのシステムを考える。持続可能でより良い施設を作るために。その図書館を「有料図書館」とした。本はデジタル化が進み、電子文庫などがより普及するだろう。しかし、本の感触、重み、ページをめくって読むという好意そのもののファンは多い。未来に本を残すために、駅で本のすばらしさを伝え、出版社がそれを支え、公立の図書館が足りない部分を埋めていく。
「有料」のシステムは、最高の書籍を生み出していくための未来への投資の形なのだ。



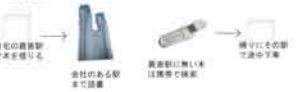
①駅と出版社

出版社は車内で本を読んでもらうことでその行為自体が本の広告になる。また、取次を通さない自由な数量・価格の操作が可能となる。

②公立図書館

図書館利用者の増加。専用新古書店で本を購入、無駄の無い本の収蔵が可能に。また、ライブラリーとの差別化から専門性が増す。

③利用者



suicaなどでシステムを管理しているので、お手軽に本を借りることができる。いろんな駅のいろんなライブラリーを楽しむこともできる。

ライブラリーの種類

・駅併設型

駅に直接設置するライブラリー。施設が大きいため蔵書量が多く、ライブラリーの拠点となる場所に主に設置。

↓

本計画では［illegible］を単位量と設定し、ライブラリーのモデルとして設計。

・駅ナカ設置型

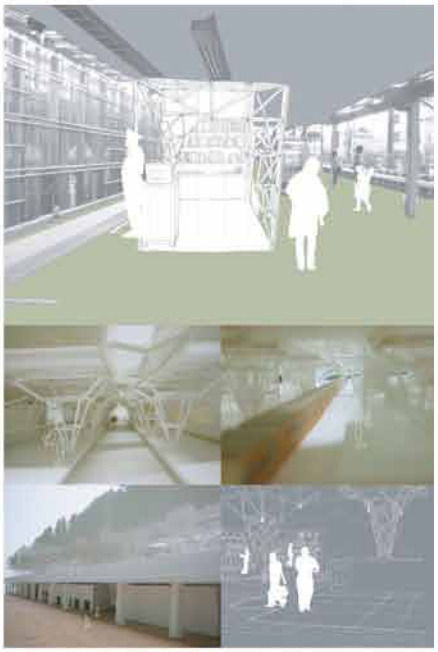
駅ナカなど、駅構内に設置するライブラリー。スペースをとらず様々な規模の駅に設置可能。また、数も様々に変化できるので、駅ごとに特色あるライブラリーができる。

↓

［illegible］をモデル駅として、駅ナカライブラリーを設計。

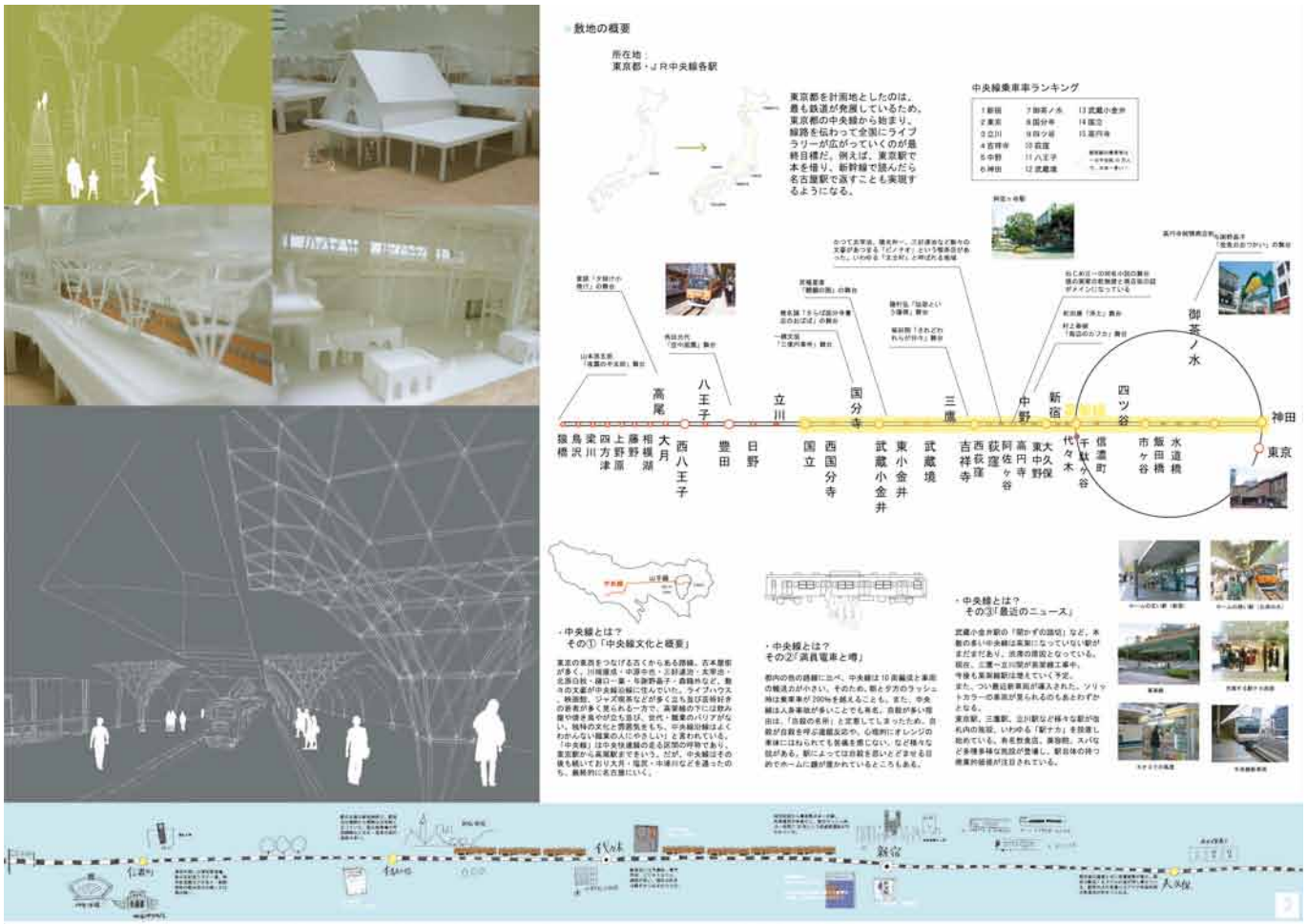
改札内ライブラリー
駅を利用しないと本が借りれるライブラリー
→ 駅前開発などが行われる時に、設置する、単純駅舎型ライブラリー
→ ホーム上の空いた空間を利用するライブラリー。蔵書量は200㎡ホームで3万冊ほど。

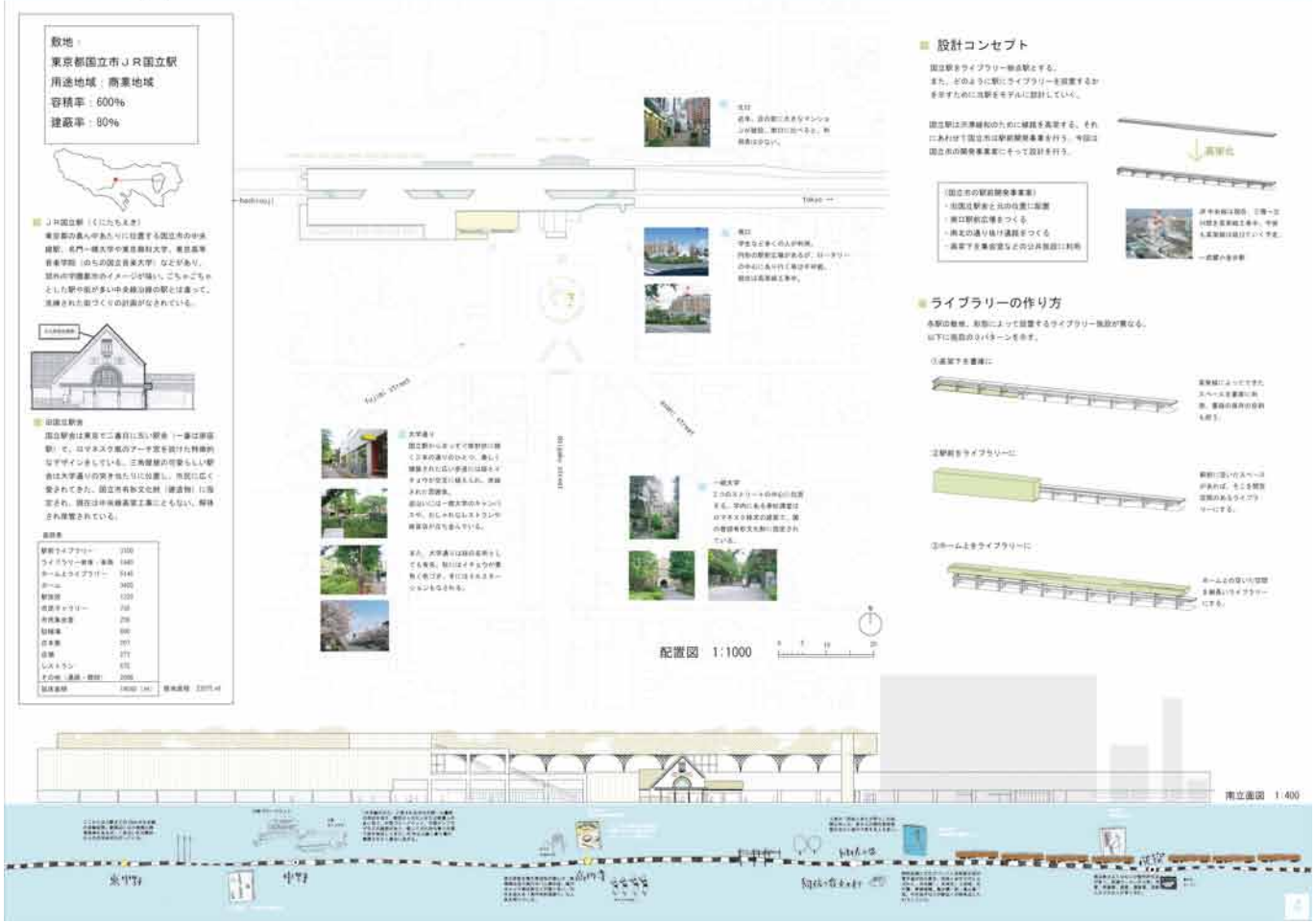
改札内ライブラリー
駅から出ずに直接行けるライブラリー
→ ホームに設置する無人ライブラリー
→ 駅構内に設置する、キオスクサイズのライブラリー
→ 駅ナカ商店に設置するライブラリー



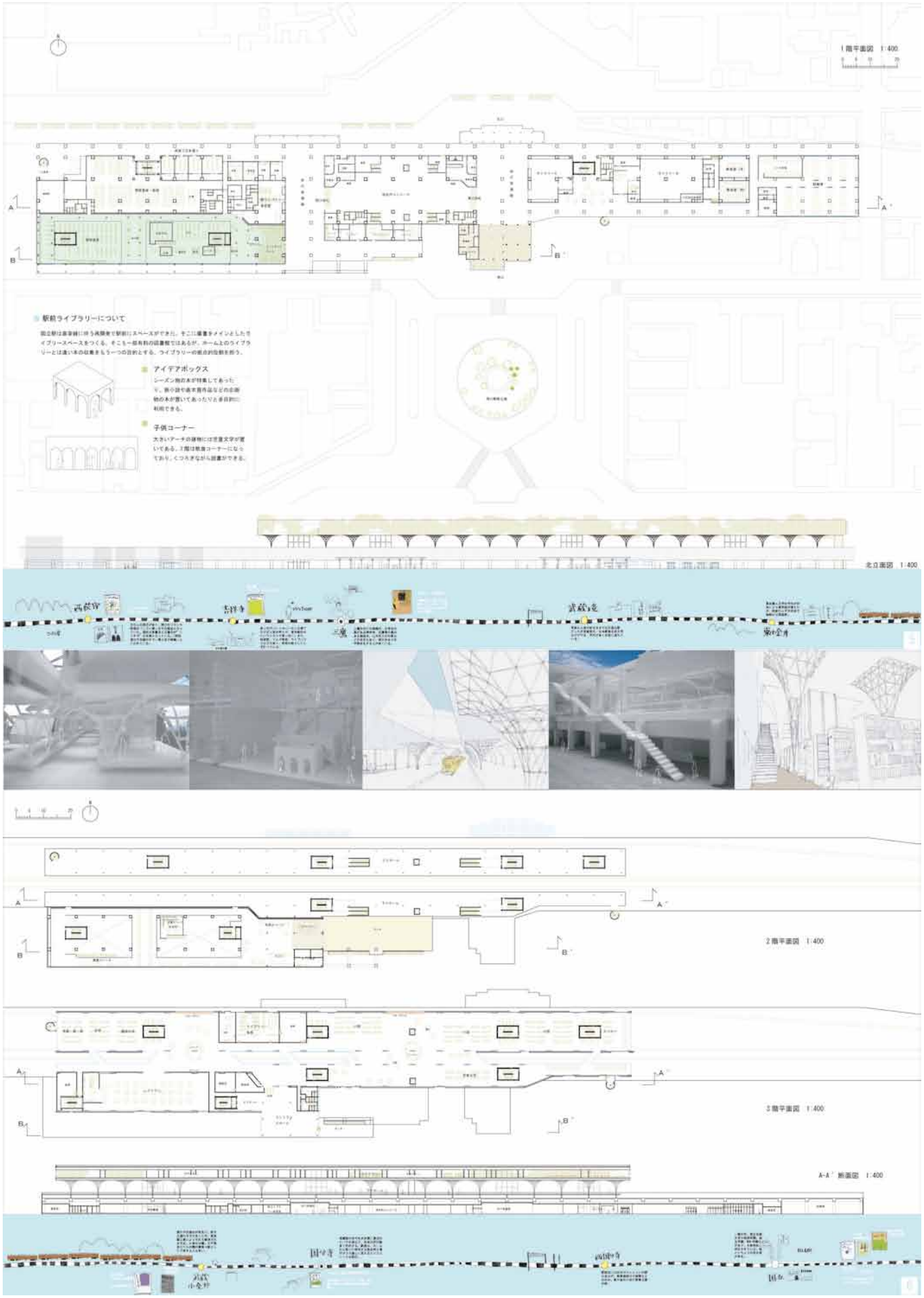
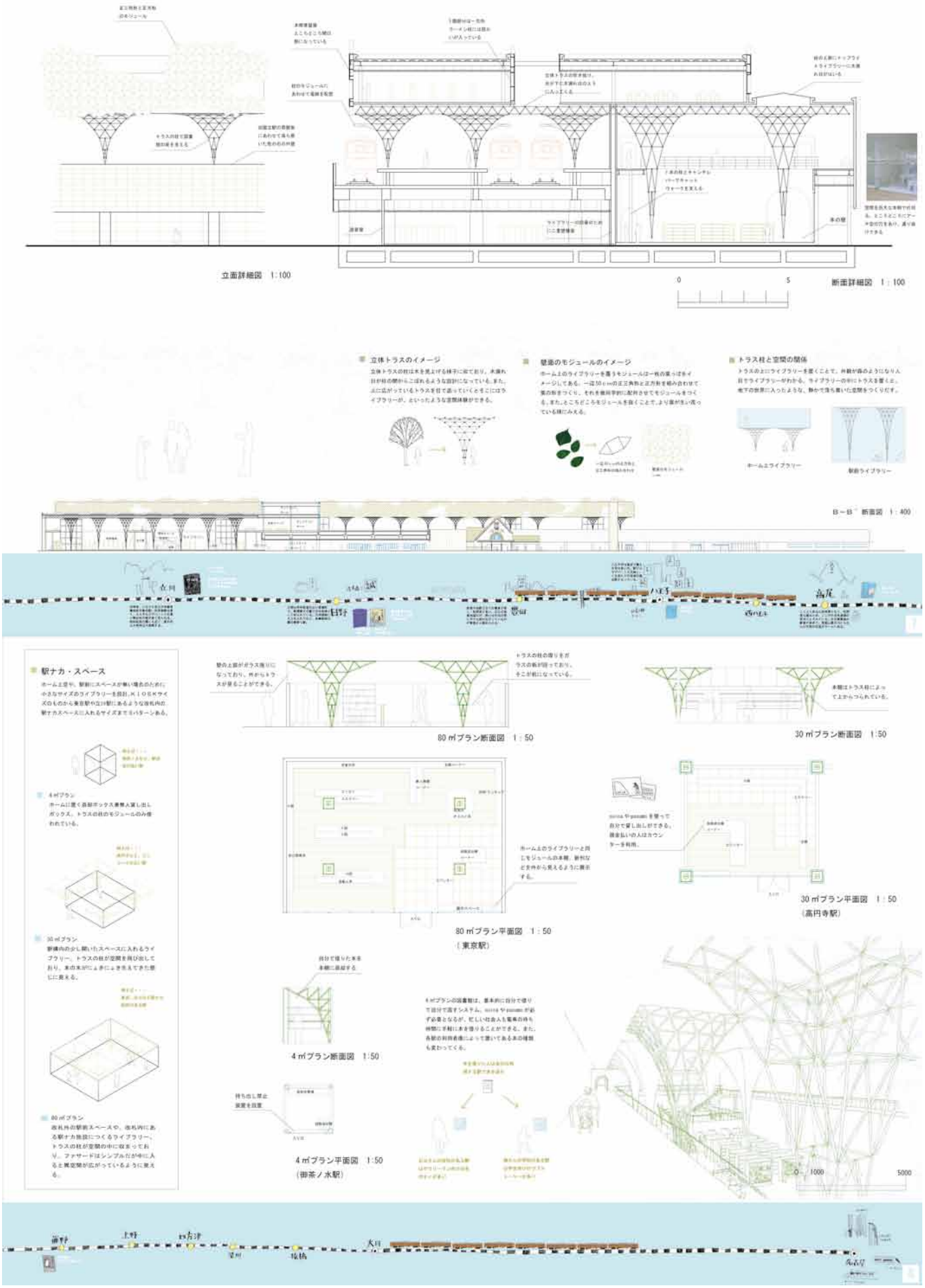
利用イメージ

「電車で出会う物語がある～ JR 中央線　本の森計画」川畑　華子





「電車で出会う物語がある～ JR 中央線　本の森計画」川畑　華子



「電車で出会う物語がある～ JR 中央線　本の森計画」川畑　華子